

六味
八味
食量

苦味者、是茶青木香等也、鹹味者、是鹽等也、

〔倭爾雅六飲食〕六味佛書、以甘辛鹹、八味、又佛書、上六味、加澀

〔類聚名物考四飲食〕人平食二合半を用る事、一日食五合、三斗五升俵

今案に、人平日の食料に二合半を用る事その故あり、靈樞平人絕穀篇および四十二難に云く、腸胃之中、常留穀二斗水一斗五升、故平人日再後、後二升半、一日中五升、七日五七三斗五升、而留水穀盡矣、故平人不飲食七日而死と見ゆ、是一日の食米五升にて、一月の食壹石五斗也、但此五升と云は、今日本の五合に當るなり、されば漢書の食貨志にも云く、今一夫挾五口食人月一石半、五人終歲爲粟九十石と見えしも、人一日に五升を食事しられたり、

〔成形圖說十一農事〕酒食

凡人一日の糧五合にして、五合は稻米三萬一千九百粒也、是一升に盛こと六萬三千八百粒の筭、と六萬六千粒とあり、是米と一穗三百餘粒の穂にして、八十八本ならでは三萬一千九百粒には升との大小差あるに、よれり、是にて人一日食ふ所の米數萬粒を費して命を續ことを思ふべし、

〔三省錄後編二〕人間一日の食料五合と定りしも、古き時よりの分料と見へ、其以前は定りなきこと見えたり、二合五勺飯、新武者物語に云、人の食物は朝暮二合五勺づ、然べしと、瀧川左近將監積り定められしなり、按にこれ一度の分量を云、朝夕にては五合なり、

〔燕石襟志二〕人間一生を五十年と見て、○中略食ふ所の米いくばくもあらず、生れてより十五歳まで、一日の食を白米三合と見て、拾六石二斗十六歳より五十歳まで、一日の食白米五合と見て、六十三石也、統計七拾九石貳斗、これを三斗五升俵にして、貳百廿六俵壹斗なるべし、

〔古今著聞集十八飲食〕三條中納言某卿は、人にすぐれたる大食にてぞ有ける、さるにつけては、おびた

大食